

## 「浅茅が宿」論—方法としての地名—

村 瀬 木綿子

### 一、はじめに

旅とは、その基底に異界への歩みを内包する。それは地名から地名への歩みであり、その時、地名という場所を名指す言葉は、物語の中に異界を現出する装置ともなる。

仏道修行の旅、政治的意味合いを含む旅、物見遊山の旅、恋の逃避行としての旅など『雨月物語』には多くの旅のかたちが登場する。その中でも「浅茅が宿」はおのれの「物にかかはらぬ性」ゆえに家を傾けてしまった主人公勝四郎が、一旗揚げるべく人生を賭けた旅にのりだすところから物語が始まる。その歩みは、下総の真間↓京↓岐曾の真坂↓近江の武佐↓下総の真間というもので、典型的な京から地方へ下るといってそれだけで異界への歩みが如実となるような旅ではない。しかし、妻宮木との別れの場面で勝四郎が語る

いかで浮木に乗つもしらぬ国に長居せん。

という言葉からは、この部分の典拠とされる『源氏物語』松風の巻で、父と別れ母とともに京に旅立つ明石の君が詠んだ別れの歌の心情と同様に「京」が「しらぬ国」としての異界と認識されていることがわかる。

勝四郎にとっての下総から京、京から下総という旅は、本来であれば数か月も要すれば十分なはずであったが、戦乱やその熟慮すること欠ける性格ゆえに七年もの歳月を費やしてしまうのである。その勝四郎の歩みを彩る、場所を名指す言葉である地名に焦点を当てて、物語の構造との関係を探ってみたい。

### 二、下総の麻から足利染の絹へ

下総の国葛飾郡真間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。

本作品は、詳細な地名の記述から始まる。「下総の国」の物語であることの明記は、物語の展開に重要な意味を持つてくる。

『古語拾遺』や延喜式に見られるように、下総の「フサ」とは麻の古名であり、その麻の産地であるために「フサ」の国と名付けられたのであった。その「総の国」での麻づくりという「農作をうたてき物に厭ひ」足利染の絹を商う商人になろうとしているのが、主人公勝四郎なのである。こうした「総の国」からの脱出は、亀井秀

キーワード：「浅茅が宿」、『雨月物語』、上田秋成、真間の手児奈、地名

雄氏<sup>(3)</sup>が指摘するように、麻と絹、田舎と都会という二項対立を物語に生み出していくのである。しかも「麻」は「フサ」であり同時に「ヌサ」とも読まれた。従って「ミヌサ」「アサヌサ」「マソヌサ」はすべて同じであり、麻苧の類は青和幣といわれ、神を禮するものであった。<sup>(3)</sup>麻は単に下総の特産物というだけではなく、神をまつるものであった。従って、勝四郎が旅立った後戦乱が真間の郷を襲った時も、じつと村にとどまり続けた勝四郎の妻宮木と足の不自由な村の古老漆間の翁が一種の神性を帯びてしまうのもこのためである。

その神にまつわる「麻」と対立するものが「足利染の絹<sup>(4)</sup>」である。勝四郎とその妻宮木の悲劇は、足利染の絹を商う商人雀部の登場によって始まる。足利染の絹とは、物語の時代設定である武家時代では、旗指物、陣幕、陣羽織などに用いられたとい<sup>(4)</sup>。従って雀部とは、一種の戦争商人であった。こうした足利染の絹を雀部や勝四郎が扱っていくことは、まさに「鎌倉の御所」足利成氏の乱という、宮木と勝四郎の別離を決定的なものにする戦乱と連動しているのである。

更に、この絹の産地を示す「足利」という地名は、「大日本地名辞書」(下巻、富山房、明治四〇・一〇)に示されているように、「アシ」⇨金銭であり、「カガ」⇨利子、利息の古語であるから、「アシカガ」とはまさに金銭、利子を表す言葉となっている。「足利染の絹」とは、戦乱の世、貨幣経済の象徴と考えることができる。麻を作る農民にとって無縁であるはずの世界に勝四郎は足を踏み入れ、

妻宮木と育ててきた世界から決定的に決別することとなる。

### 三、<sup>(5)</sup>東

この主人公夫婦の別れの場面では、秋には必ず戻るといふ約束がなされる。そして勝四郎の旅立ちを語る場面には次のようにある。

鳥が啼く東<sup>(5)</sup>を立出て京の方へ急ぎけり。

「東<sup>(5)</sup>」という「下総」よりさらに大きな広がりを持つ、場所を示す言葉が物語に何をもちたらすのか。「東<sup>(5)</sup>」という言葉が背負っているものを解きほぐすことによつて、その意味が明らかとなる。

「東<sup>(5)</sup>」という言葉の本来の意味(例えば、アイヌ語として「アツ」⇨豊饒、「マ」⇨地とする説や、「ア」が接頭語で、「ツマ」はその端を意味するという解釈など)<sup>(5)</sup>が、長い時を経て忘れられ、その由来がわからなくなつたとき、そのいわれを知ろうとする欲求が地名起源説を生み出してきた。そして、この「アツマ」に「吾嬬」と当てたとき、一つの伝承が生み出されていく。記紀に記されたヤマトケルの東征伝承の一話がそれである。海神を鎮めるために海に身を投げた妻オトタチバナヒメを想い、ヤマトケルは「吾嬬はや」(『日本古典文学大系 日本書紀 上』岩波書店 昭和四二・二三)と嘆息する。それでこの一帯を「アツマ」というとした地名起源説話となる。「風土記」で「我姫<sup>(6)</sup>」(『日本古典文学大系 風土記』岩波書店 昭和三三・四)と記されているのも、基底にこのヤマトケル伝承が存在していることを示している。「アツマ」という地名

にこの伝承が重ね合わされたとき、この地名は、失ってしまった妻をしのぶという物語を持ってしまふのである。

勝四郎がこの「東を立出て京の方へ急」ぐ直前の部分には、不本意ながら夫の旅支度をかいがいしく整え、夫の不在を心細く思う妻宮木の様子や言葉が語られる。それに対し、夫勝四郎が

いかで浮木に乗つもしらぬ国に長居せん。葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。

と答える。この二人の別れの場面は、従来指摘されてきたように引歌、枕詞、序詞といった様々な和歌的修辭を背景にして、二重構造を持つ部分となっている。すなわち、かいがいしくも夫に仕えながら不安を口にする妻と、秋には帰ると確約する夫という表面上の物語の裏に、妻宮木の死や勝四郎の破約、そして妻の恨みといった当の本人たちには思いもよらない将来が透けて見える表現を持つ場面となっている。

そしてこの場面の直後に来るのが、さきに引用した「東」への出立の部分なのである。二人の思いとは裏腹に、予見される暗い将来をさらに補強する形で、「東」という言葉が「妻の死を嘆く夫」という物語の結末へと導くものとなっている。希望に満ち溢れた勝四郎の出発は、すでに物語の結末—亡き妻をしのぶ—という悲劇に彩られたものになっているのである。

#### 四、岐會の真坂

俄か商人となった勝四郎は、高田衛氏が「西鶴織留」以来の出稼ぎ失敗譚の「パタン」を踏んでいると指摘された通り、京で得た富を帰郷の途次の「岐會の真坂」で「落草ども」に略取される。

落草ども道を塞へて、行李も残りなく奪はれしがうへに、人のかたるを聞けば、是より東の方は所々に新関を居て、旅客の往来をだに宥さざるよし。さては消息をすべきたづきもなし。家も兵火にや亡びなん。妻も世に生であらじ。しからば古郷とても鬼のすむ所なりとて、ここより又京に引きかへすに、

勝四郎は、故郷が戦場になっているとの噂を耳にし、急ぎ帰郷の途に就く。しかし、「岐會の真坂」で「落草ども」にすべてを奪われたことが、勝四郎の故郷へと向かう気持ちをそいでしまう。従って、東方に新関が据えられたため、これ以上は進めないという噂を受け入れ、もはや故郷も妻も失われたに違いないと思ひ込むことしたのであろう。その意味で、この「岐會の真坂」での災難は、この物語の上における重要なターニングポイントになっているのである。

『雨月物語』の諸注釈書では、この「岐會の真坂」を長野県西筑摩郡山口村馬籠峠の古名で、古来の歌枕の地であるという説明を与えている。『大日本地名辞書』（同前）において、「馬籠」の項には次のように記されている。

今神坂村と改む、盖木會の御坂の義敷、然れども神の御坂、一名科野坂の古跡にはあらず。

ここでは、「ミサカ」と呼ばれる地名が二つあると示されている。このもう一方の「神の御坂」とされている方は岐阜県下伊那郡阿智村との県境の峠で、ヤマトタケルが東国征伐の際に通ったと記紀に記されている所である。田辺幸雄氏は『万葉集東歌』（塙書房 昭和三八・九）において、太古からの交通路が「神の御坂」であり、それが險難さゆえに荒廃し、鎌倉期には大方の旅人が木曾街道の「馬籠峠」を通ったと指摘している。しかし、「ミサカ」といった地名からもたらされるイメージは、こうした道の新旧に何の区別も与えるものではなかった。『木曾路名所図会』（文化二年刊）の「御坂山古道」の項において、「神の御坂」での歌（『万葉集』巻二〇の四四〇二番歌）やヤマトタケルの記紀伝承までもが、この「馬籠峠」の伝承や歌として載せられているのである。旧道だった「神の御坂」の伝承の著名さが、旧道の荒廃とともに失われてしまうのではなく、逆に新道である馬籠峠の「ミサカ」にその旧道の背負ってきた伝承などが移植されたかたちで理解されてきたことがわかる。従って、勝四郎が越えようとした「岐會の真坂」は、「神の御坂」とよばれる一種の神的なイメージがもたらされてくる。

このような「ミサカ」とは、境界としての「サカ」である以上、両義的空間であり、それ自体が聖なる空間となる。

ちはやふる 神のみ坂に 幣奉り 齋ふ命は 母父がため

（『日本古典文学全集 萬葉集3』小学館 昭和五四・一一）

この『万葉集』巻二〇の埴科郡神人部子忍男の歌によれば、幣を奉らねば命を落としてしまうような、そんな荒ぶる神がこの「ミサカ」

にいう信仰が見える。これは『古事記』や『日本書紀』にも記されている。特に『日本書紀』の記述に注目すると、

則日本武尊、進<sub>レ</sub>入信濃。是国也、山高谷幽、翠嶺萬重。人倚杖而難<sub>レ</sub>升。（略）山神令<sub>レ</sub>苦<sub>レ</sub>王、以化<sub>レ</sub>白鹿立<sub>レ</sub>於王前。王異之、以<sub>二</sub>箇蒜彈<sub>一</sub>白鹿。則中<sub>レ</sub>眼而殺之。（略）先是、度<sub>二</sub>信濃坂<sub>一</sub>者、多得<sub>二</sub>神氣<sub>一</sub>以瘕臥。但從<sub>レ</sub>殺<sub>二</sub>白鹿<sub>一</sub>之後、踰<sub>二</sub>是山<sub>一</sub>者、嚼<sub>レ</sub>蒜而塗<sub>二</sub>人及牛馬<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>中<sub>二</sub>神氣<sub>一</sub>也。

（『日本古典文学大系 日本書紀上』岩波書店 昭和四二・三）  
 というように、白鹿と化した坂の神に襲われたヤマトタケルが、白鹿を蒜で打ちすえ、殺すという話がある。しかもこの坂の神の毒気にあてられた者は皆、「瘕臥」すことになったとされている。この一節とほぼ同様な話が『古事記』では足柄山の話とされている。「神の御坂」、「足柄山」にかかわらず、このヤマトタケルの東征の一連の話の最後は、記紀ともに伊吹山の神に殺されてしまう悲劇で幕を閉じる。こうしたことから、境界である「坂」の神は、そこを通過するものをただでは通さず、たとえばその毒気にあてて病を与えたり、殺してしまうような恐ろしい存在とされていたことがわかる。

そして「浅茅が宿」の勝四郎は、このような「道を塞<sub>レ</sub>へ」る「塞えの神」を思わせる荒ぶる坂の神としての「落草ども」によって、すべてを奪われてしまう。さらに帰郷を諦め、京にとつてかえす途中、

近江の国に入て、にはかにこちあしく、熱き病を憂ふ。

とあたかも「神の御坂」の神の毒氣にあてられたかのように病を得てしまうのである。「岐曾の真坂」を越えようとした直前の本文では、次のような記述がみられる。

当時このころ都は花美くはひを好む節とちなれば、よき徳とりて東あづまに帰る用意はかりごとをなすに、

大方の読者の想像を裏切つて勝四郎は商売に成功し、故郷に帰る準備を始めたところであつたが、以下には、戦乱が故郷のあたりにまで及んでいるという不確かな噂に「心も心ならず」という状態で京をたつたことが記されている。ここでも「東あづま」が再び登場している点に注目したい。「京」に対する「東」という語の選択がなされたのは当然としても、それだけではなく、この場面の基底には先に見た一連のヤマトタケルの東征伝承が流れているということである。

ヤマトタケルの東国征伐の話は、「古事記」と「日本書紀」ではそのルートがかなり異なっているが、両作品ともにヤマトタケルは坂の神を服従させた後で、以前、東征の途次、海の神を鎮めるために入水したオトタチバナヒメをしのんで「アツマハヤ」と嘆くのである。すなわち、「浅茅が宿」のこの場面に「東あづま」という言葉が選ばれたとき、ここでも亡き妻をしのぶ夫の姿というものが予見され、坂の神に苦しめられることで運命が変わってしまう主人公達のありようが、この地名と密接に関連していることがわかる。

## 五、武佐むさの児玉こたま氏

万葉の旅人のように「幣」も持たず、ヤマトタケルのように「蒜」も身に付けていなかった勝四郎は、その命のかわりに京で得た富を「ミサカ」の神としての「落草ぬすびとども」に差し出さねばならなかった。しかも前に見たように「ミサカ」の神は通行人を「瘻へ臥」してしまふものであつた。勝四郎は、京に引き返す途中の中山道の宿場「武佐」で熱病を患つてしまふ。

「武佐」は中山道沿いに位置する交通の要衝で、早くから市が発達し宿場として有名な場所であつた。<sup>10</sup>この地で古くから知られていたのは、武佐寺で、「源平盛衰記」「近江国輿地志略」「木曾路名所図会」などにその縁起が記されている。それは聖徳太子伝承で、聖徳太子の勤めにより仏教に帰依したため苦しみから救われたという内容となつている。こうした聖徳太子伝承のある土地は、日本中に数多くあり、この武佐寺もその一つといえよう。旅の途中の病は死を意味したはずであるが、勝四郎は幸運にも、雀部の妻の実家である児玉氏から手厚い看護を受け、回復する。太子の靈験あらたかな地に偶然たどり着いた幸いなかもしれない。

ただ注目したいのは、この「武佐」という地名そのものである。これについて「近江国輿地志略」(享保一九年成立)には次のように記されている。

古人多武佐寺と云 或は武者に作り、また牟佐に作る

〔大日本地志大系 近江国輿地志略〕 大日本地志大系刊行会

大正四・九)

すなわち、「ムサ」には「武佐」の他に「武者」「牟佐」があてられたのである。貝原益軒の「木曾路之記」（宝暦六年成立）では、この地を「武者」と記す（『益軒全集』巻七 益軒全集刊行会 明治四四・八）。こうした表記は他にも見られ、大納言雅也『富士紀行』では

武者の宿につき侍で。

わが君の御代をおさむる武者の名を聞里もしつか也けり

〔群書類従〕一八輯 昭和三四・一二

とあり、また一条兼良の『藤川の記』では

その日は武佐といふ所にやどる

もの、ふの湯がけはたてぞなびくなるうべこそ武佐の名は残り

けれ

〔続帝国文庫 続々紀行文集〕博文館 明治三四・一〇

と記されている。「武佐」という地名は「武者」（「ものふ」）を想起させるものであったことがわかる。

この「武佐」について青木正次氏は「戦乱の都でも、荒廃した東国でもなく、その間のすさまじい安穩な地」と述べている。確かに病に冒された勝四郎がたどり着いた「武佐」はまだ戦火に脅かされる状態ではなかった。さらにそこで呑気に七年間もの間、人の世話になって暮らしていた。その意味で「安穩な地」と言えよう。しかし、「武佐」という地名の裏に「武者」―戦乱というものが透けて見えてしまうと、そこはやはりどこかきき臭い土地になってし

まうのである。勝四郎のここでの七年間については詳しく語られず、ただ

いつのほどか此里にも友をもとめて、揉ざるに直志を賞せられて、児玉をはじめ誰々も頼もしく交りけり。此後は京に出て雀部をとふらひ、又は近江に帰りて児玉に身を托、七とせがほどは夢のごとくに過しぬ。

というように命の恩人である近江の児玉氏の家と京の雀部のところを行き来していたとだけ記されている。この「武佐」で多くの友もでき、まさに「安穩な」生活を送っているように読める。しかし、この「武佐」が古くから、市が立っていた交易の場であることや、児玉氏の家が戦争商人である雀部の妻の実家であり、かつて勝四郎が雀部の助けで戦争商人の一端を担っていたことを考えると、勝四郎の詳述されていない「武佐」での七年間は戦乱をたずさとしていたことが想像に難くない。「武佐」という地名がそれを語るのである。

さらに注目したいのは、「武佐」という一見平和な土地の裏に戦乱がほの見え、またここに故郷に置き去りにしてきた妻宮木の存在が示唆されている点である。この地で勝四郎を救った人物の姓「児玉」は、この土地にある姓ではあるが詳細は分からない。諸注釈書でも、この名についての説明はことさらされてこなかった。物語が進み、勝四郎が七年ぶりに帰郷し、亡き妻宮木の霊と再会（この時、勝四郎は妻の死に気づいていない）した翌朝、宮木の墓らしきものを見つけ妻の死を知り、その詳しい事情を聴くために村の古老漆間

の翁のところに行く場面がある。

吾主遠くゆき給ひて後は、夏の比より干戈を揮ひ出て、里人は所々に遁れ、弱き者どもは軍民に召るるほどに、桑田にはかに狐兎の叢となる。只烈婦のみ主が秋を約ひ給ふを守りて、家を出給はず。(略) 一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりしを、

この漆間の翁の言葉から故郷真間の地が戦乱に巻き込まれたことがわかる。ここで注目したいのが、「一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりし」の部分である。この部分の典拠とされている「源氏物語」の蓬生の巻は、この表現のみならず、勝四郎の帰宅の場面全体にわたって影響を与えていることは多く指摘されてきた。光源氏が訪れなくなった末摘花の屋敷では、女房達が次々に去っていく、そのわびしさを記した場面に「木霊など、けしからぬ物ども」(日本古典文学全集 源氏物語二) 小学館 昭和四七・一)とあり、荒れ果てた邸の様子が描かれる。また、荒廃してしまつた屋敷で光源氏を待ち続ける末摘花の姿が、そのまま勝四郎の帰りを待つ宮木の姿に重ねられている。この意味で「樹神」は、夫のいない荒涼とした風景を表すものとなっている。

鶴月洋氏の『雨月物語評釈』(角川書店 昭和四四・三)では「樹神」の語釈として、

樹木の精霊。老木などに住むと信じられていた妖怪、時に天狗などをいった。人に崇ると信じられていた。

とある。ここでは「天狗」とあるが、「狐」なども同列ないしは

そのものと思われていたようである。「天狗」の表記は本文には出てこないが、「狐」は「鴛鴦」とともに宮木(死霊)の言葉の中にも、典拠作品「源氏物語」の蓬生の巻にもでてくる。それは、帰宅した夫にそれまでの自分の生活を語る宮木の言葉の中に見える。

軒端の松にかひなき宿に、狐鴛鴦を友として今日までは過しぬ。

「軒端の松」とは挿絵にもある、勝四郎が「我軒の標」とした「雷に摧れし松」であり、当然「待つ」がかけられ、その背後に「待つ」という行為が酷くも絶たれたことを意味するものとなっている。「樹神」が宿つたのもこの「雷に摧れし松」なのだろう。宮木は戦乱が押し寄せてきた故郷でたつたひとり、「狐鴛鴦」「樹神」を友として生きていたことがわかる。もちろんこの姿は、もはや生者ではないことを示している。ちょうど「武佐」という戦乱を想起させる場所で、一種、戦乱を生きるすべにし、勝四郎は「児玉」を友として生き抜いていた時、戦乱で生きるすべを失つた宮木は「樹神」(「狐鴛鴦」)を友とする異界のものとして夫を待ち続けるしかなかったのである。

前章「岐會の真坂」で見たように、ヤマトタケル伝承が基底にあったことを考えると、勝四郎はここで一度死を経験し、そして「武佐」で再生したことになる。「武佐」という戦乱をイメージさせる地で再生し、戦乱を利用することで生きたと想像できる勝四郎の背後には、まさにその戦乱ゆえに命を失う宮木の姿が示唆されている。その意味で「武佐」と「真間」は一種、表裏一体の関係となつ

ている。

## 六、真間の郷

勝四郎が七年ぶりに帰郷するところから物語はいつきにクライマックスへとむかう。「下総の国葛飾郡真間の郷」が、その故郷であるという設定は物語の冒頭に明記されている。すなわち、物語の舞台として「真間」が選ばれているのである。当然のことながら「真間の手児奈」の伝承がこの物語の基底にあるのだろうと読者に想像させるようになっていいる。実際、物語の最後、漆間の翁が、勝四郎と一緒に宮木の墓前で通夜をした時に、「真間の手児奈」の昔話を語る。多くの男の求愛に応えることができず入水自殺をしてしまった古代の美女手児奈のように、宮木も入水自殺をするのだろうかと思わせる。またさらに、本作品の典拠作品である「剪灯新話」巻三「愛卿伝」と、その翻案小説である浅井了意の「伽婢子」巻六「藤井清六遊女宮城野を娶る事」も併せて考えてみると、夫勝四郎の不在中に宮木が貞操の危機に直面し、それが理由で自死するのではないかと予測させる設定となっている。しかし、実際にはそうした想像は裏切られる。

一たび離れまいらせて後、たのむの秋より前に恐しき世の中となりて、里人は皆家を捨て海に漂ひ山に隠れば、適に残りたる人は、多く虎狼の心ありて、かく寡となりしを便りよしとや、言を巧みていざなへども玉と砕ても瓦の全きにはならはじもの

をと、幾たびか辛苦を忍びぬる。

たしかに、宮木が勝四郎に再会した際に述べたこの言葉から、典拠作品の愛卿のような貞操の危機が何度かあったことがわかるようになっていいるが、それ以上は語られず、

軒端の松にかひなき宿に、狐鶴鷗を友として今日までは過しぬ。

と、多くの下心のある男達の誘惑にもならず「深く閉こもりて」家から出ることはなかったとされている。愛卿や手児奈の自死の理由とは異なり、宮木の場合は、貞操を守ることによって結果的に死んでしまふというものであった。

物語の舞台設定の「真間」を冒頭で提示し、末尾に有名な「真間の手児奈伝承」を具体的に記し宮木と手児奈を重ねて見せるわけだが、やはり両者のありようが微妙にずれているため、手児奈伝承の登場の唐突さが指摘され、またその両者の共通性が何かということが多く論じられてきた。本文で手児奈伝承を語る漆間の翁が、

此の亡き人の心は昔の手児女がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけん

と宮木と手児奈の共通性を「をさなき心」と語り、この「をさなき心」の解釈は「純粋な心」とされてきた。

「真間の手児奈」の原像が、神を斎く巫女（水の女）とすれば、その一般男性の求愛を拒む理由がわかつて来る。その意味で手児奈に神性、靈性を見るならば、「樹神」や「狐鶴鷗を友として」きた宮木にもそうした属性を共通点として読み取ることのできるだろ



う。また、夫を待ち続ける純粹さという宮木の心に、手児奈の「さなき心」を見ることも可能だろう。しかし、手児奈は、多くの男の愛に応えられず死を選んだのであり、宮木は、たった一人の男（勝四郎）の愛に応えるために結果として死んでしまったのである。手児奈が「待たせる女」であるとすれば、宮木は「待つ女」となり、ほぼ正反対と言ってもよいありようとなっている。そこから示される共通性は「死」とその証となる「墓」だけなのである。

### 七、壺つが

物語の最後に漆間の翁が語った「真間の手児女」の物語は、『万葉集』の高橋虫麻呂の「勝鹿の真間の娘子を詠む歌」（巻九 一八〇七番歌）によっている。また山部赤人の「勝鹿の真間の娘子が墓に過る時に、山部宿禰赤人の作る歌」（巻三 四三二番歌）も参考にしたとされている。『万葉集』の歌人達が手児奈の歌を詠んだのは、手児奈への鎮魂であり、旅の安全を祈願するためのものであったと、稲田篤信氏は指摘される。土地土地を巡るとき、その霊を慰めることで通行を許してもらうわけである。古来その鎮魂の方法として歌が有効なものであり、それが歌枕という、地名と歌との結びつきであった。高橋虫麻呂は『万葉集』の伝説歌人であったので、実際に「真間」の地に足を運んだかは別として、「勝鹿の真間の娘子を詠む歌」は、手児奈の墓を詠んだものである。また山部赤人の歌はまさに「勝鹿の真間の娘子が墓に過る時」に詠まれたもので、

その長歌（四三二番歌）の末尾には

勝鹿の 真間の手児名が 奥つきを こことは聞けど 真木の  
葉や 茂りたるらむ 松が根や 遠く久しき 言のみも 名の  
みも我は 忘らゆましじ

とあり、その反歌（四三三番歌）は、

我也見つ 人にも告げむ 勝鹿の 真間の手児名が 奥つき處  
とされ、手児奈の墓所を訪ね、その痕跡を見つめている。また、高橋虫麻呂の手児奈を詠んだ一八〇七番歌の直後に位置する一八〇九（一八一）番歌は、手児奈と並んで有名な古代の悲劇のヒロイン「菟原処女」の歌で、「菟原処女の墓を見る歌」（一八〇九番歌）とされ、やはりその後半に

永き代に 標にせむと 遠き代に 語り継がむと 処女墓（略）  
とやはり墓所を詠むものとなっている。高橋虫麻呂の一八〇七番歌（手児奈を詠んだ長歌）の直前にある田辺福麻呂の歌も「葦屋の処女の墓に過る時に作る歌」（一八〇一）番歌）で、「菟原処女」の墓を見て、

菟原処女の 奥つ城を 我が立ち見れば 永き世の 語りにし  
つつ 後人の 惚ひにせむと（略）この道を 行く人ごとに  
行き寄りて い立ち嘆かひ 或る人は 音にも泣きつつ 語り  
継ぎ 惚ひ継ぎ来る 処女らが 奥つ城所 我さへに 見れば  
悲しも 古思へば

と詠み、長く語り継がれてきた「菟原処女伝承」の感動を表している。

このように『万葉集』の歌人達の認識として、土地の伝承（伝承化された死の物語）を歌に詠むこと＝墓を詠むことであった。この場合、墓とは、旅の安全を祈願する場所であり、同時に伝承の一種の実体化したものと考えられる。墓は伝承の実在を保証するものとして機能しているのである。従って、さきに引用した山部赤人の四三一番歌、四三二番歌には、手児奈の墓の跡がもはやわからなくなっていることが詠まれ、しかしそれでも実際に見ることのできない墓の痕跡をそこに見つけることで、手児奈の実在を感じようとするものになっている。特に、山部赤人の四三二番歌、高橋虫麻呂の一八〇九番歌、田辺福麻呂の一八〇一番歌には、墓が、その墓にまつわる伝承を「永き世」の「標」にして「遠き代」に「語り継ぐ」ためのものと顕著に示されている。墓はその土地とそこに生きた人間の物語の実在を保証するもので、それが失われることなく語り継がれ、伝承化されていくための装置なのである。

この「浅茅が宿」も宮木の墓（壠）の物語となっている。七年ぶりに故郷へ戻ろうとやっと思いついた勝四郎が、まず考えたのが、

ありつる世にはあらずとも、其あとをももめて壠をも築べけれ

ということであった。帰郷後、妻の亡霊とも知らず再会を果たした翌朝、

むかし閨房にてありし所の簀子をはらひ、土を積て壠とし、雨露をふせぐまうけもあり。（略）水向の具物せし中に、木の端

を刪りたるに、那須野紙のいたう古びて、文字もむら消して所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり。法名といふものも年月もしるさで、三十一文字に末期の心を哀れにも展たり。

と妻の墓を見つけ、初めて妻の死を確信する。ここには詳細な墓の描写がほどこされている。この後、漆間の翁が、

老が手づから土を運びて柩を蔵め、其終焉に残し給ひし筆の跡を壠のしるしとして蕪繁行潦の祭りも心ばかりにものしけるが、翁もとより筆とる事をしもしらねば、其年月を紀す事もせず。寺院遠ければ贈号を求むる方もなくて、五とせを過し侍るなり。

ともう一度、宮木の墓について語る。このように何度も繰り返して墓について語られ、勝四郎は物語末尾でこの墓を前に漆間の翁と通夜をした時、

いにしへの真間の手児奈をかくばかり恋てしあらん真間のごなを

と「田舎人の口鈍く」も詠むのである。この歌は『万葉集』巻一四の三三三四番歌

葛飾の真間の手児奈をまことかも我に寄すとふ真間の手児奈をを想起させるものとなっていることから、勝四郎は、かつてこの「真間」の地で、手児奈の墓のところで歌を詠んだ万葉時代の歌人達に重ね合わされていく。しかも、物語の最後の一文で、

かの国にしばしばかよふ商人の聞伝へてかたりけるなりき。とあり、もはや勝四郎と宮木の物語が、商人達によって語り伝えら

れていることになっている。すなわち、「真間の宮木伝承」がここに完成したことを示すものとなっているのである。宮木の墓も、「真間の手児奈」や「菟原処女」の墓と同じように、その生の「標」となり「永き世」「遠き代」に語り継がれるためのものとなったということになる。このように考えると、さきに引用した漆間の翁の

此の亡人なまの心は昔の手児女てごながをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけん

という言葉は、この宮木の物語が手児奈の物語をしのぐものであることの表明ともいえる。

その意味で、「浅茅が宿」という作品は、「真間」の新しい伝承を作り出すもので、現実の「真間」という土地の背負いこむ古伝承への挑戦を孕んだものであると言えよう。

## 八、おわりに

この物語は、言葉が背負い込んでいるもの自体が有機的に作品に機能している様がよくわかるものであり、それは場所を名指す言葉—地名にも同様に取れる。地名は多くのものを宿した言葉である。その地形、神々の行為、そこに生きた人々の物語、そしてそこにまつわるあらゆる表現されたものなどが、その短い言葉の中に存在する。こうした地名という言葉の持つ意味合いを有機的に使ってみせたのが本作品である。

本稿では、地名の持つイメージの喚起力を利用して、物語展開や、

本文に語られていない隠された部分の真相を明かすなど、地名が物語の構造に機能させられている様子を見てきた。なかでも、「真間」という地名に含まれた伝承を作品の中に据えることで、ある出来事が物語化（伝承化）されていく過程を具体的に再現してみせるといふ、物語の生成過程そのものが示されている。物語はどう生まれ、また物語はどう伝承化されていくのかを示すものになっている。従って、本作品は「真間」という現実の場所への物語からの挑戦であり、その時新たな物語、伝承が再生産されていく。地名が物語の発生に関わるならば、地名は物語そのものの方法であるといえるだろう。

## 注

- (1) 天富命、更求沃壤、分阿波齋部、率往東土、播殖麻・穀。好麻所生。故、謂之総国。〔古語拾遺〕 岩波書店 昭和六二・一一
- (2) 「身体・この不思議なるものの文学」(れんが書房新社 昭和五九・一一)
- (3) 新井白石「東雅」(新井白石全集) 卷四 明治三九・四
- (4) 鶴月洋「雨月物語評釈」(角川書店 昭和四四・三)
- (5) 折口信夫「万葉集辞典」(折口信夫全集) 六卷 中央公論社 昭和五七・六
- (6) 西郷信綱「古代の声」(朝日新聞社 平成七・八)
- (7) 長島弘明「NHK文化セミナー 江戸文芸をよむ 雨月物語(上)」(日本放送協会 平成六・一〇)
- (8) 高田衛「幻語の構造—雨と月への私注」(現代詩手帖) 所収 思潮社 昭和四七・一〇

- (9) 『古事記』におけるイザナギの黄泉の国訪問譚で、イザナギがイザナミラの追跡を避るために、黄泉平坂に置いた石、すなわち「道反之大神」あるいは「塞り坐す黄泉戸大神」が後の道祖神となる。境にあつて外部から侵入する疫病や悪霊を塞ぎとめる神。
- (10) 『角川地名大辞典 二五 滋賀県』(角川書店 昭和五四・四)
- (11) 青木正次 『雨月物語(上) 全訳注』(講談社 昭和五六・六)
- (12) 『近江蒲生郡志』巻八(滋賀県蒲生郡役所 大正一一・五)
- (13) 4と同じ
- (14) 『精選版日本国語大辞典』
- (15) 7と同じ
- (16) 稲田篤信氏は「浅茅が宿 試論」(『俄草子』 昭和五一・二)の中で、これを内面の死であり、観念的な死であるとされている。
- (17) 「愛卿伝」のあらすじは次のようである。  
もと名妓の愛卿は、名家の趙氏と結婚する。官吏としてとりたててもらったため、母と妻愛卿を故郷に残し趙氏は上京する。しかし、就職の話がうまくいかず、結局長く都に逗留することになってしまう。その間に故郷は戦場となり、故郷で貞操の危機に直面した愛卿は自死を選ぶ。帰郷した趙氏が、母や妻の死を知り、妻の墓を掘り起こしてみると、まだ生前と変わらぬままの姿だった。妻の亡霊の出現を熱望したところ、願いがかない妻の霊と再会する。
- (18) 折口信夫によれば、「手児奈」のような女性は多くいたとされている。
- (19) 16と同じ
- (20) 以下『万葉集』の引用はすべて『日本古典文学全集』(小学館 昭和五四・一一)
- (21) 今回の論では地名を中心に論じているので、これに対する考察は示さなかった。『雨月物語』に使われる言葉には、多く典故があり、その言葉の背景にあるものがほぼ間違いない意識的に使われている。これらは、多くの論者によっても指摘されてきた。

テキスト『雨月物語』は安永五年刊記本を用い、句読点を明記した。